

# 非主張性尺度と青年用アサーション権尺度の作成

目白大学大学院心理学研究科 高濱 怜美  
目白大学人間学部 沢崎 達夫

## 【要約】

近年、自分も相手も大切にしているコミュニケーションであるアサーション (assertion) が注目されている。本研究の目的は、相手は大切にしているが自分は大切にしないコミュニケーションタイプである「非主張性 (non-assertiveness)」と、自分はアサーティブな表現をする権利を持っていると理解している「アサーション権 (the right of assertion)」を測定する尺度を作成することであった。大学生男女218名を対象に、非主張性尺度、青年用アサーション尺度と青年用アサーション権尺度、自尊感情測定尺度で構成された集団式の調査を行った。その結果、非主張性尺度と青年用アサーション尺度は負の相関が示されたことから、非主張性尺度の妥当性は概ね確認されたと考えられた。また、青年用アサーション権尺度と自尊感情測定尺度は無相関であることが示され、青年用アサーション権尺度の妥当性は確認されなかった。今後の課題として、より精度の高い尺度の完成が求められると考えられた。

キーワード：アサーション、非主張性、アサーション権、尺度

## 1. 問題と目的

### 1) アサーション (assertion) とは

近年、円滑なコミュニケーションをとるために、“自分も相手も大切にしたい自己表現” (平木, 2009) であるアサーションが注目されている。アサーションは従来、「自己主張」や「主張性」という訳語が用いられてきた。しかし、日本語の「主張」という言葉には、「自分勝手」「我が強い」といった否定的な意味が含まれており (柴橋, 1998)、現在では「アサーション」と表現することが多くなってきている。その一方で、「主張性」や「自己主張」という言葉も未だ使われているため、本研究では著者がアサーションと同義または訳語として「主張 (性)」という言葉を使っている場合には、そのまま「主張 (性)」という言葉を使うこととする。

アサーションという概念は、多くの研究者によって定義されてきた。Wolpe (1958: 金久監訳, 1977) や清水・森田・竹沢・赤築・久保

田・三島・永田 (2003)、塩見・伊藤・中田・橋本 (2003) は、感情や意見を表現する行動やスキルとしてアサーションを捉えている。一方平木 (2009) や渡部 (2006) は、アサーションが自らの「主張する」という行動だけでなく、行動の背景にある認知的な側面も含んでいると同時に、自分だけでなく相手も尊重するコミュニケーションであることを示している。アサーションという概念の捉え方は様々あるが、自己の感情や意見を率直に表現する行動に加え、その行動に関わる自己内省や状況判断といった認知、さらにはその行動をとる他者をも受容するという、包括的な概念であると言える。

### 2) 非主張性 (non-assertiveness) とは

アサーティブではない自己表現は、「攻撃的」または「非主張的」な自己表現と分類される。攻撃的な自己表現は“自分は大切にしているが、相手を大切にしない自己表現”、非主張的な自己

表現は“自分は大切にしないが、相手を大切に  
する自己表現”（沢崎，2006）である。非主張  
性の特徴として、自分の感情を表現できない、  
自分の感じた感情を押し殺す、まわりくどい言  
い方をするなどが挙げられており（安藤，  
2009a；平木，2009）、「言えない」という行動  
だけでなく、表現することへの不安、表現する  
ことは出来ても相手にきちんと伝えることが出  
来ないといった要素が含まれている。よって本  
研究では、非主張性を「自分の感情、意見、欲  
求等を率直に表現することに対して不安・抵抗  
等を感じることによって、それらを表現できな  
いあるいは表現し損なうこと」と定義すること  
とした。

### 3) アサーション尺度における非主張性

アサーション尺度は、近年日本内外において  
様々なものが開発されている。特に、青年期を  
対象とした日本の尺度においては、玉瀬・越  
智・才能・石川（2001）の青年用アサーション  
尺度が代表的である。この尺度は、「関係形成」  
と「説得交渉」の2因子全16項目から構成され  
ており、高い信頼性と妥当性を備えていること  
から、多くのアサーション研究で使用されてい  
る。

柴橋（1998）は、現在開発されている主張性  
尺度の課題の1つとして、“主張性得点の低い  
者の中に、必ずしも即座に応答するのではなく、  
引くべき時には引き、出るべき時には出ると  
いった熟考的な主張性や、受動的な攻撃性、  
引っ込み思案などが含まれている可能性がある”  
ことを指摘している。同様に渡部・松井  
（2006）は、“従来の主張性研究では、自分の考  
えや感情を実際に表明しているかどうかという  
側面に焦点をあてていたため、相手の都合や状  
況を考えて自ら引くといった複雑な行動は、非  
主張的で適応的でないものと評価されている”  
と指摘している。柴橋（1998）や渡部・松井  
（2006）の指摘は、主張性得点の低い者が非主  
張的であるとは限らないことを示唆している。  
また、金子・中田（2003）は、“自分が主張し  
ないと決めたらそれも1つの主張である”と述  
べ、平木（2009）は基本的なアサーション権の  
1つとして「自己主張しない権利」をあげてい

る。畑中（2003）は発言抑制に焦点を当てた研  
究の中で、自己を主体的に表現しない権利も保  
証していることを指摘しており、“自己を表現  
しない行動の一部は、必ずしも不適応的なコミ  
ュニケーション様式ではない”としている。

これらの指摘から、①非主張性を直接測定す  
ることができる尺度がないこと、②現在開発さ  
れているアサーション尺度では、尺度得点の低  
い者が一様に非主張性と扱われていること、と  
いう2つの課題が考えられる。アサーションと  
非主張性は概念上区別されているが、現在開発  
されている尺度を用いてアサーションと非主張  
性を区別して測定することは難しい。しかし  
Deluty（1981）は、アサーション・トレーニ  
ングを進めていくためには、“アサーティブでは  
ないもの”のもとにある不足しているスキル  
や、抑圧されている部分、信念体系など認知的、  
感情的、行動的査定尺度をまず構築することが  
必要であると指摘している。このことから、非  
主張性に対応していくためには、非主張性の高  
さをアセスメントするための、非主張性を独立  
して測定することのできる尺度を作成すること  
が必要であると考えられる。よって本研究では  
非主張性尺度を開発し、非主張性を独立して測  
定することで非主張性の高さをアセスメントで  
きる尺度の作成を行うことを目指すものとし  
た。

加えて、畑中（2003）の研究では、発言抑制  
に関する尺度について性差が確認されたもの  
は、いずれも男性より女性の方が発言を抑制し  
ていると報告している。安藤（2009b）はアサ  
ーション研究を性差の観点から整理する中で、  
アサーションの概念が人権運動の後押しを受け  
て発展してきた時代背景も含め、女性のアサ  
ーティブな行動は制限されており、それは現在も  
残っていることを指摘している。こうした背景  
を鑑みると、アサーティブな行動を暗黙のうち  
に制限されている女性は、「主張しない」という  
意思のもとで発言を控える場合もあれば、主張  
する行動を他者から良く思われたい、経験が少  
ないためにスキルが低いといった、非主張的な  
要素を持っている可能性がうかがえる。そのた  
め、本研究で作成した非主張性尺度において性  
差を確認し、先行研究との相違を検討する必要

があると考える。

#### 4) アサーション権について

アサーション権とは、“自己表現の権利という基本的な人権”と言われており(平木, 2009), 平木(2009)はその著書の中で, アサーション権の重要性について触れている。また, アサーション・トレーニング実践の中でもアサーティブなコミュニケーションのために重視される要素である。アサーション・トレーニング実践の中では, アサーション権は, その権利を持っていることを認識し, 行使できることが重要であることが, アサーティブなコミュニケーションへと繋がっていきと言われている(平木・土沼・沢崎, 2002; 平木, 2009など)。このように, アサーション権はアサーション実践の中では重要視されている要素であり, また多くの先行研究でも指摘されているが(高橋, 2006; 渡部・稲川, 2002など), 実証的研究の中ではほとんど触れられていない概念である。そのため「アサーション権」は定義も定まっておらず, 非常にあいまいな概念となっている。しかし, アサーション研究の成果を今後実践へと活かしていくためには, アサーション・トレーニング実践の中で, 当然のこととして指摘されている事項を実証的に裏づけることが求められ, それ故に実証的に検討しておくべき概念である。よって, 本研究においてアサーション権を「自分の選択でアサーティブに表現して良いとする権利」と定義し, 渡部・稲川(2002)が児童用に作成したアサーション権尺度を参考に青年用アサーション権尺度を開発することで, 今後のアサーション研究の更なる発展を目指すものとした。

渡部・稲川(2002)の作成した尺度は, アサーション権の認知的側面について測定している尺度であると考えられるため, 本研究においてもそれにならい, 青年期におけるアサーション権の認知を測定する尺度を作成することとした。

#### 5) 本研究の目的

以上のことから本研究の目的は, ①本研究における定義「自分の感情, 意見, 欲求等を率直

に表現することに対して不安・抵抗等を感じることによって, それらを表現できないあるいは表現し損なうこと」を満たす非主張性尺度を作成し, 信頼性及び妥当性を確認すること, ②青年用アサーション権尺度を作成し, 同様に信頼性及び妥当性を確認することとした。

## 2. 研究方法

上記の目的のため, 大学生男女218名を対象に質問紙調査を行った。質問紙は, 講義終了時に配布・回収した。研究の主旨の説明, 回答は無記名で行うこと, 個人が特定されることはないこと, 回答したくない質問は飛ばして良いこと, 回答用紙は厳重に管理し, 研究終了後は速やかに処分することを質問紙表紙に記載し, また質問紙配布時に口頭で説明し, 了承を得た者のみ回答してもらった。調査実施時期は2010年6月中旬から7月初頭であった。収集したデータのうち, 欠損値のあったデータを除き, 191名(男性65名, 女性126名)を分析の対象とした。平均年齢19.09歳,  $SD = 1.54$ であった。

質問紙は, 非主張性尺度, 青年用アサーション尺度(玉瀬他, 2001), 青年用アサーション権尺度, 自尊感情測定尺度(Rosenberg, 1965; 山本・松井・山成訳, 1982)で構成した。

非主張性尺度は, Personal Relations Inventory(Lorr & More, 1980; 古市他訳, 1991), 大学生用主張性尺度(矢嶋・土肥・坂野, 1994)の下位尺度のうち頻度尺度, アサーション尺度(村山・山田・峰松・冷川・田中・田村, 1989), College Self-Expression Scale(Galassi, Dole, Galassi & Bastein, 1974; 古市他訳, 1991), 大学生用アサーション尺度(小野・平木・嶋田, 2004), 友人関係における配慮行動尺度・主張性の4要件尺度(渡部, 2010), 日本版Rathus Assertiveness Schedule(清水他, 2003)から, 本研究における非主張性の定義「自分の感情, 意見, 欲求等を率直に表現することに対して不安・抵抗等を感じることによって, それらを表現できないあるいは表現し損なうこと」に即した内容の項目を選定した。質問項目は専門家1名と大学院生4名で内容を検討し, 大学生の生活に則するよう必要な修正を行い, 全40項目とした。「全く当てはま

らない(1点)」「やや当てはまらない(2点)」「やや当てはまる(3点)」「非常に当てはまる(4点)」の4件法で回答を求め、非主張性尺度得点が高いほど、非主張性が高いと判断した。

非主張性尺度の妥当性を確認するために、青年用アサーション尺度(玉瀬他, 2001)を同時に実施した。青年用アサーション尺度は多くの先行研究で信頼性と妥当性が確認されている尺度である。各下位尺度得点が高いほどアサーティブであると判断できることから、非主張性尺度と負の相関が得られることで、非主張性尺度の妥当性が確認されるものと考えた。青年用アサーション尺度は全16項目で、「全く当てはまらない(1点)」「やや当てはまらない(2点)」「どちらとも言えない(3点)」「やや当てはまる(4点)」「非常に当てはまる(5点)」の5件法で回答を求めた。

青年用アサーション権尺度は、渡部・稲川(2002)が児童用に作成したものを大学生に適用出来るよう、専門家1名と大学院生7名で協議し、質問内容を検討、修正した。項目数は全10項目であった。「全く当てはまらない(1点)」「やや当てはまらない(2点)」「どちらとも言えない(3点)」「やや当てはまる(4点)」「非常に当てはまる(5点)」の5件法で回答を求め、アサーション権尺度得点が高いほど、アサーション権の認知が高いと判断した。

青年用アサーション権尺度の妥当性を確認するために、自尊感情測定尺度(Rosenberg, 1965; 山本他訳, 1982)を同時に実施した。平木(2009)は、アサーティブに行動するためには自身の行動に自信を持つことが必要であり、その自信を得るためにアサーション権を知り、確信することが大切であると指摘している。また、塩見他(2003)は、中学生を対象とした調査から、アサーション尺度の下位尺度である「正当な権利」と自尊感情尺度の下位尺度「自信」との間に正の中程度の相関( $r = .26, p < .001$ )を見出しており、アサーション権と自尊感情は正の相関が得られると考えられた。自尊感情測定尺度(Rosenberg, 1965; 山本他訳, 1982)は多くの研究で妥当性と信頼性が確認されている尺度である。青年用アサーション権尺度と正の相関が得られることで、青年用アサー

ション権尺度の妥当性が確認されるものと考えた。項目は全10項目で、「全く当てはまらない(1点)」「やや当てはまらない(2点)」「どちらとも言えない(3点)」「やや当てはまる(4点)」「非常に当てはまる(5点)」の5件法で回答を求め、尺度得点が高いほど自尊感情が高いと判断した。

### 3. 結果

#### 1) 非主張性尺度の作成

非主張性尺度40項目の因子構造を明らかにするために、因子分析(主因子法, プロマックス回転)を行った。因子負荷量が.40以上を基準とし、その結果12項目を採用、2因子構造を見出した(Table 1)。

第1因子は「間違っただけを言ったり、したりするのはないかと、心配になる」「人が自分のことをどう思うかとても心配だ」を始めとする6項目に高い因子負荷量を示し、「主張に対する不安・後悔」と命名した。第2因子は「あまり気に入らないものを店員がしつこくすすめる時、『いらない』と言うのが難しい」「自分の意見を素直に言うことは気後れする」を始めとする6項目に高い因子負荷量を示し、「率直な意見表明の回避・困難」と命名した。各因子名は、今後の分析において下位尺度名として採用し、各下位尺度の平均点をそれぞれの尺度得点とした。各下位尺度ごとの信頼性は、「主張に対する不安・後悔」が $\alpha = .81$ 、「率直な意見表明の回避・困難」が $\alpha = .74$ であった。各下位尺度の基礎統計量は、「主張に対する不安・後悔」は平均3.13,  $SD = .59$ 、「率直な意見表明の回避・困難」は平均2.22,  $SD = .62$ であった。

玉瀬他(2001)の青年用アサーション尺度は、「関係形成」「説得交渉」の2因子構造の全16項目で構成されている尺度である。本研究ですでに信頼性及び妥当性は確認されているものとし、先行研究に従い2因子構造として分析を行った。

非主張性尺度の妥当性を確認するために、青年用アサーション尺度の下位尺度「関係形成」と「説得交渉」とのPearsonの積率相関係数を求め、結果をTable 2に示した。「主張に対する不安・後悔」と「説得交渉」( $r = -.16, p < .05$ )

に有意な弱い負の相関が認められた。「率直な意見表明の回避・困難」と「関係形成」の相関係数は $r=-.462$  ( $p<.01$ )、「率直な意見表明の回避・困難」と「説得交渉」との相関係数は $r=-.52$  ( $p<.01$ )とそれぞれ有意な中程度の負の相関が

それぞれ認められた。

非主張性尺度の各下位尺度において得点の男女の平均に違いがあるのかを検討するため、 $t$ 検定を行った (Table 3)。その結果、「率直な意見表明の回避・困難」において、男性より女性

Table 1 非主張性尺度 (主因子法・プロマックス回転)

	因子	
	1	2
1 間違っことを言ったり、したりするのではないかと、心配になる	.71	-.06
2 人が自分のことをどう思うかとも心配だ	.65	-.02
3 何か発言した後で、「言わなければよかった」、あるいは、「別の言い方をすべきだった」と思うことがある	.65	-.21
4 自分の意見や気持ちを言わずにいて、あとから「言えばよかった」と思うことがある	.65	.05
5 主張するタイミングを逃してしまう	.60	.10
6 言いたいことがあっても、どう言っているかわからないことがある	.57	.14
7 あまり気に入らないものを店員がしつこくすすめる時、「いらぬ」と言うのが難しい	-.08	.65
8 自分の意見を素直に言うことは気後れする	-.11	.62
9 買い物をして、お釣りが少ないことに気がついて、そのことを店員に言うことができない	.13	.62
10 買った商品に欠陥があると分かっても、交換してもらうのは、気がひける	-.04	.57
11 大事な話の途中で、人が口をはさんできて、その人に、ちょっと待ってほしいと頼みにくい	-.04	.51
12 友達と意見が異なると、不安な気持ちになる	.19	.45
信頼性係数 ( $\alpha$ )	.81	.74
因子間相関	.38	

Table 2 非主張性尺度と青年用アサーション尺度の相関係数

	主張に対する不安・後悔	率直な意見表明の回避・困難	関係形成
率直な意見表明の回避・困難	.38 **		
関係形成	-.13	-.46 **	
説得交渉	-.16 *	-.52 **	.42 **

\* $p<.05$  \*\* $p<.01$

Table 3 非主張性尺度の性差 (カッコ内はSD)

	男性 ( $n=65$ )	女性 ( $n=126$ )	$t$ 値 ( $df$ )
主張に対する不安・後悔	3.07 (.69)	3.15 (.53)	-.81 (103.51)
率直な意見表明の回避・困難	2.06 (.60)	2.30 (.62)	-2.55* (189)

\* $p<.05$

の方が有意に高かった ( $t = -2.55, df = 189, p < .05$ )。「主張に対する不安・後悔」においては、性差は見られなかった ( $t = -.81, df = 103.51, n.s.$ )。

## 2) 青年用アサーション権尺度の作成

渡部・稲川 (2002) の児童用アサーション権尺度に修正を加えた青年用アサーション権尺度全10項目に対して、因子構造を明らかにするために、因子分析 (主因子法, プロマックス回転) を行った。因子負荷量が.40以上を基準に、8項目を採用、2因子構造を見出した (Table 4)。

第1因子は「相手に何かを頼んだ時、相手はその頼みを引き受けなくても良い」「自分は他の人とは違うし、人と違っているのが当たり前である」をはじめとする5項目に高い因子負荷量を示し、「自他の主体性の尊重」と命名した。第2因子は「自分の行動に責任を持てば、自分でどう行動するかを決めて良い」「人は誰でも自分の気持ちや考え、意見、希望などを言っても良い」「人は誰でも失敗をするものだし、失敗

しても良い」の3項目に高い因子負荷量を示し、「主体的自己責任」と命名した。各因子名は今後の分析において下位尺度名として採用し、各下位尺度の平均点をそれぞれ下位尺度得点とした。下位尺度ごとの信頼性は、「自他の主体性の尊重」が  $\alpha = .84$ 、「主体的自己責任」が  $\alpha = .77$ であった。各下位尺度の基礎統計量は、「自他の主体性の尊重」は平均4.14,  $SD = .70$ 、「主体的自己責任」は平均4.14,  $SD = .80$ であった。分布に偏りがあると思われたため、項目ごとの平均値と標準偏差を確認したところ、2項目において天井効果が確認された。しかし、これらの項目を削除することによって内的整合性が低下することから、削除を行わずに今後の分析に用いることとした。

Rosenberg (1965; 山本他訳, 1982) の自尊感情測定尺度は、1因子構造の全10項目で構成されている尺度である。本研究では、信頼性及び妥当性はすでに確認されているものとし、因子構造は山本他 (1982) に従って1因子構造として分析を行うものとした。

青年用アサーション権尺度の妥当性を確認す

Table 4 青年用アサーション権尺度 (プロマックス回転)

	因子		平均値 (SD)
	1	2	
10 相手に何かを頼んだ時、相手はその頼みを引き受けなくても良い	.92	-.16	3.74 (.91)
9 自分は他の人とは違うし、人と違っているのが当たり前である	.69	.07	4.42 (.79)
8 他の人から一緒に何かをしようと誘われても、その誘いを断っても良い	.63	.21	4.16 (.80)
7 自分の話や考えを他の人に聞いてもらいたい時には、そのことを相手に伝えても良い	.62	.09	4.13 (.77)
6 頼まれたことを断るのも悪いことではないし、自分勝手というわけでもない	.59	.10	4.14 (.85)
2 自分の行動に責任を持てば、自分でどう行動するかを決めて良い	-.12	.95	4.02 (.95)
1 人は誰でも自分の気持ちや考え、意見、希望などを言っても良い	.13	.61	4.22 (.87)
3 人は誰でも失敗をするものだし、失敗しても良い	.18	.52	4.33 (.89)
信頼性係数 ( $\alpha$ )	.84	.77	
因子間相関	.61		

るために、自尊感情測定尺度との相関係数を算出した (Table 5)。「自他の主体性の尊重」と「自尊感情」の相関は $r = .05$  (*n.s.*)、「主体的自己責任」と「自尊感情」との相関は $r = .05$  (*n.s.*)で、それぞれ有意な結果は得られなかった。

自尊感情との相関関係は確認されなかったが、アサーション権の認知が高いことでアサーティブな行動ができることが、平木他 (2002) や平木 (2009)、高橋 (2006) によって示唆されていることから、青年用アサーション権尺度と青年用アサーション尺度の相関係数を算出し、検討することとした (Table 6)。「自他の主体性の尊重」と「関係形成」の相関係数は $r =$

.23 ( $p < .01$ )、「自他の主体性の尊重」と「説得交渉」の相関係数は $r = .20$  ( $p < .01$ )、「主体的自己責任」と「関係形成」の相関係数は $r = .29$  ( $p < .01$ )であり、それぞれ有意な相関が認められた。

青年用アサーション権尺度の各下位尺度において得点の男女の平均に違いがあるのかを検討するため、*t*検定を行った (Table 7)。その結果、「主体的自己責任」において、有意な性差が得られ、男性より女性の方が有意に高かった ( $t = -2.56$ ,  $df = 107.31$ ,  $p < .05$ )。「自他の主体性の尊重」においては、性差は見られなかった ( $t = -.14$ ,  $df = 189$ , *n.s.*)。

Table 5 青年用アサーション権尺度と自尊感情測定尺度の相関係数

	自他の主体性の尊重	主体的自己責任
主体的自己責任	.61**	
自尊感情	.05	.05

\*\* $p < .01$ 

Table 6 青年用アサーション権尺度と青年用アサーション尺度の相関係数

	自他の主体性の尊重	主体的自己責任
関係形成	.23**	.29**
説得交渉	.20**	.12

\*\* $p < .01$ 

Table 7 青年用アサーション権尺度の性差 (カッコ内はSD)

	男性 ( $n=65$ )	女性 ( $n=126$ )	<i>t</i> 値 ( <i>df</i> )
自他の主体性の尊重	4.04 (.74)	4.18 (.68)	-.14 (189)
主体的自己責任	3.92 (.90)	4.25 (.72)	-2.56* (107.31)

\* $p < .05$

#### 4. 考察

##### 1) 非主張性尺度

本研究ではまず、先行研究から非主張性の定義に合致する項目を選定して尺度を構成した上で調査を行った。その結果因子分析を行い、信頼性係数を算出して尺度の信頼性を確認した後、玉瀬他（2001）の青年用アサーション尺度との相関係数を求め、妥当性を確認した。

非主張性尺度は、第1因子「主張に対する不安・後悔」、第2因子「率直な意見表明の回避・困難」共に内的整合性は概ね備えていると判断した。

玉瀬他（2001）の青年用アサーション尺度との相関係数は、「主張に対する不安・後悔」と「関係形成」、「主張に対する不安・後悔」と「説得交渉」とそれぞれ有意な弱い負の相関が認められた。「率直な意見表明の回避・困難」は「関係形成」、「説得交渉」とそれぞれ有意な中程度の負の相関がそれぞれ認められた。非主張的な行動はその特徴から、自分の気持ち、考え、信念などを正直に、率直に、その場にふさわしい方法で表現し、相手が同じように発言することを奨励する（平木、2009）ことや、自分だけでなく相手も尊重するコミュニケーション（渡部、2006）であるアサーティブな行動とは負の相関があることが予想された。沢崎（2006）は、玉瀬他（2001）の青年用アサーション尺度は、「関係形成因子」と「説得交渉因子」の2因子からアサーション行動を捉えようとするものであると述べ、同様に渡部（2006）は、アサーティブな行動頻度や行動傾向を尋ねる尺度であると分類していることから、青年用アサーション尺度はアサーション行動に焦点を当てた尺度であると言える。非主張性尺度における「率直な意見表明の回避・困難」は、実際に非主張的な行動を取るかどうかを尋ねた項目で構成されているため、青年用アサーション尺度の両下位尺度とは中程度の負の相関が得られたものと考えられる。これによって、非主張性尺度の「率直な意見表明の回避・困難」について妥当性が確認されたものと判断した。

一方、「主張に対する不安・後悔」は主張する際または主張した後の感情の動きについて尋ねる項目で構成されている。青年用アサーション

尺度は行動に焦点を当てているため、感情に焦点が当たっている「主張に対する不安・後悔」とは弱い負の相関に留まったものと考えられる。しかし、弱いながらも「率直な意見表明の回避・困難」同様負の相関が得られ、手続きにおいても内容的妥当性を検討しており、これについては十分な妥当性を備えていると判断した。

畑中（2003）や安藤（2009b）は、女性の方が主張行動が少ない傾向にあることを指摘している。非主張性尺度においても、「率直な意見表明の回避・困難」において性差が確認され、男性よりも女性の方が非主張的であるという結果になった。本研究における性差の検討は、畑中（2003）や安藤（2009b）の傾向と合致し、男性よりも女性の方が非主張的な傾向があると言えよう。

##### 2) 青年用アサーション権尺度

青年用アサーション権尺度は、因子分析の結果、渡部・稲川（2002）が作成したのから、因子負荷量と解釈のしやすさを考慮して2項目削除し、8項目となった。第1因子「自他の主体性の尊重」、第2因子「主体的自己責任」それぞれで天井効果が確認されたが、天井効果が得られた2項目を削除することによって内的整合性が低下することから、削除せずに分析に用いた。

Rosenberg（1965；山本他訳、1982）の自尊感情測定尺度との相関係数は、「自他の主体性の尊重」、「主体的自己責任」とも、有意な相関は得られなかった。青年用アサーション権尺度では、データの分布に偏りがあり、天井効果が確認されている。青年用アサーション権尺度の項目は、このような権利を持っていると認識しているかを尋ねている内容となっている。天井効果が確認されたということは、「やや当てはまる（4点）」「非常に当てはまる（5点）」の高い得点に回答する協力者が多かったためである。アサーション権は自己表現の権利という基本的な人権（平木、2009）であり、本研究で取りあげた項目は、多くの人が持っていると認識している権利であると言えよう。しかし、その項目の選定については、再度検討する必要が

あると考えられる。

塩見他（2003）の結果から、青年用アサーション権尺度と自尊感情は正の相関が得られるものと推測された。しかし本研究では、有意な正の相関は得られなかった。一方で、青年用アサーション尺度（玉瀬他，2001）との負の相関が得られた。この結果から、アサーション権とアサーティブな行動についての関連が示された。

平木他（2002）は、アサーションを導入したカウンセリングの中で、クライアントが自分の感情を表現してもよい権利を自分も持っていることを認識し、さらにそれを確信していく過程で自己信頼と自己受容を重ねる事例を紹介している。アサーション・トレーニングの中では、このように権利を知り、それが個人の中に根付くことで、自己受容や自己肯定感が高まるとされている。平木他（2002）は、“アサーション権を知り確信すること”と繰り返し述べており、アサーション権は、まずは知っている・持っていることと認識すること、その上で行使しようという意志と責任を持って行動することが重要であると考えられる。アサーション・トレーニング実践の中では、権利意識を持ち、それを行使できるようになる、すなわちアサーティブな行動ができるようになる過程に様々な要素が想定されており、自尊感情もその要素に含まれていると考えられる。また、平木他（2002）や平木（2009）の指摘から、その関係は双方が影響し合う関係であることが予測される。本研究においては、アサーション・トレーニング実践や先行研究で示唆されてきたアサーション権の認識とアサーティブな行動の関連は概ね確認され、本研究で当初意図していた形とは異なるが、青年用アサーション権尺度の妥当性は概ね確認されたと考える。一方で、自尊感情との関連は確認されなかった。阿部（2007）や沢崎（2006）の研究から、自尊感情とアサーティブな行動との関連はすでに示されていることから、アサーティブな行動、アサーション権の認識、自尊感情それぞれ関連については、今後も更に検討を重ねることが求められよう。

### 3) 総合考察

本研究は、非主張性尺度及び青年用アサーシ

ョン権尺度の作成を試みた。各尺度においてそれぞれ課題が残っているが、あまり検討されずにいた非主張性およびアサーション権という概念について実証的に検討できる尺度を作成したという点について、アサーション研究における新たな一歩を踏み出せたものと考えられる。しかし、それぞれの尺度について、信頼性及び妥当性について概ね確認された一方で、項目選定や既存の尺度との相関係数の低さなど、それぞれ課題が残る結果であると言えよう。今後も更に検討を重ね、非主張性を独立して測定する尺度、及びアサーション権を測定できる精度の高い尺度の完成が求められよう。

### 【引用文献】

- 阿部真由美（2007）. 大学生の友人関係におけるアサーション—「自己受容」と「他者受容」のバランス 聖心女子大学大学院論集, **29**, 177-196.
- 安藤有美（2009a）. 大学生における自己表現スタイルと場面特性との関連 カウンセリング研究, **42**, 50-59.
- 安藤有美（2009b）. 性差の観点からみたアサーション研究の概観 名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要心理発達科学, **56**, 95-104.
- Deluty, Robert. H (1981). Assertiveness in children: Some research considerations. *Journal of Clinical Child Psychology*, **10**, 149-155.
- Galassi, J. P., Dole, J. S., Galassi, M. D. & Breit, S. (1978). The measurement of assertiveness and aggressiveness. *Journal of Personality Assessment*, **42**, 277-284.
- 畑中美穂（2003）. 会話場面における発言の抑制が精神的健康に及ぼす影響 心理学研究, **74**, 95-103.
- 平木典子（2009）. 改訂版 アサーション・トレーニング—さわやかな〈自己表現〉のために— 日本・精神技術研究所.
- 平木典子・土沼雅子・沢崎達夫（2002）. カウンセラーのためのアサーション 金子書房.
- 金子幾之輔・中田久美子（2003）. アサーションに関する研究 桜花学園大学人文学部研究紀要, **5**, 49-54.
- Lorr, M. & Morr, W. W. (1980). Four dimensions of assertiveness. *Multivariate Behavioral Research*, **2**, 127-138.
- 三田村仰・横田正夫（2006）. アサーティブ行動阻

- 害の要因について—対人恐怖心性からの検討—  
パーソナリティ研究, **15**, 55-57.
- 村山正治・山田裕章・峰松 修・冷川昭子・田中克江・田村隆一 (1989). 精神的健康に関する研究—アサーション尺度作成を中心として— 健康科学, **11**, 121-128.
- 小野久美子・平木典子・嶋田洋徳 (2004). 大学生用アサーション尺度開発の試みと信頼性・妥当性の検討 日本カウンセリング学会第37回大会発表論文集, 170-171.
- Rathus, S. A. (1973). A 30-item schedule for assessing assertive behavior. *Behavior Therapy*, **4**, 398-406.
- Rosenberg, M. (1965). *Society and adolescent self-image*. Princeton: Princeton University Press.
- 沢崎達夫 (2006). 青年期女子におけるアサーションと攻撃性および自己受容との関係 目白大学心理学研究, **2**, 1-12.
- 柴橋祐子 (1998). 思春期の友人関係におけるアサーション能力育成の意義と主張性尺度研究の課題について カウンセリング研究, **31**, 19-26.
- 清水隆司・森田汐生・竹沢昌子・赤築綾子・久保田進也・三島徳雄・永田頌史 (2003). 日本版Rathus Assertiveness Schedule (RAS) の作成と信頼性・妥当性の検討 産業医科大学雑誌, **25**, 35-42.
- 塩見邦雄・伊達美和・中田栄・橋本秀美 (2003). 中学生のアサーションについての研究: 自尊感情との関連を中心にして 兵庫教育大学研究紀要. 第1分冊, 学校教育・幼年教育・教育臨床・障害児教育, **23**, 69-80.
- 高橋均 (2006). アサーションの規定因に関する研究の動向と問題 広島大学大学院教育学研究科紀要, **1**, 35-43.
- 玉瀬耕治・越智敏洋・才能千景・石川昌代 (2001). 青年用アサーション尺度の作成と信頼性および妥当性の検討 奈良教育大学紀要 人文・社会科学, **50**, 221-232.
- 渡部麻美 (2006). 主張性尺度研究における測定概念の問題—4要件の視点から— 教育心理学研究, **54**, 420-433.
- 渡部麻美 (2010). 高校生の主張性の4要件と友人関係における行動および適応との関連心理学研究, **81**, 56-62.
- 渡部麻美・松井豊 (2006). 主張性の4要件理論に基づく尺度の作成 筑波大学心理学研究, **32**, 39-47.
- 渡部玲二郎・稲川洋美 (2002). 児童用自己表現尺度の作成, および認知的変数と情緒的変数が自己表現に及ぼす影響について カウンセリング研究, **35**, 198-207.
- Wolpe, J. (1958). *Psychotherapy by reciprocal inhibition*. Stanford, California: Stanford University Press. (金久卓也 監訳(1977). 逆制止による心理療法 誠信書房)
- 山本真理子・松井豊・山成由紀子 (1982). 認知された自己の諸側面の構造 教育心理学研究, **30**, 64-68.
- 矢嶋亜咲子・土肥夕美子・坂野雄二 (1994). 大学生用主張性尺度の作成の試み ヒューマンサイエンスリサーチ, **3**, 91-106.

## Construction of the non-assertiveness scale and the right of assertion scale for adolescents

Satomi Takahama    Mejiro University, Graduate School of Psychology  
Tatsuo Sawazaki    Mejiro University, Faculty of Human Sciences

Mejiro Journal of Psychology, 2013 vol.9

### **[Abstract]**

Assertion, a way of communication that respects both oneself and others, has recently drawn attention. This study constructs a new scale, to assess non-assertiveness, communication which does not respect oneself and the right of others, and knowledge that allows others to assert themselves. Participants were 218 students from a university in Tokyo. A questionnaire was administered including items from the non-assertiveness scale, assertion-scale for adolescents, the right of assertion scale for adolescents and Japanese Rosenberg self-esteem scale. Results revealed a significant correlation coefficient between the values of non-assertiveness and assertion. However, the values of the right of assertion and the self-esteem scale did not show a significant correlation. In addition, the results elucidated the validity of the non-assertiveness scale. Nevertheless, for further progress in the study of the non-assertiveness, the construction of a highly precisely non-assertiveness scale is needed.

**keywords** : assertion, non-assertiveness, the right of assertion, scale